

バトルスピリッツ～転生してきた未来のカードバトル

ジ・アンサー団

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺はジュン。この世界にやってきた転生者だ

この世界だったら結構卑怯なカードを使うけど、未来のカードだから大丈夫だね

そう言えば俺もコアの光主だ

色は

黄金の、アルティメットだ!!

目次

新たな光主登場!?!その名は黄金の戦士	1
バトル 《前半》	6
バトル 《後編》	13
心に残る仲間と、開始、絆の連鎖	17
緑の極悪と騎士の無双	20
黄金の説明	30

新たな光主登場!?!その名は黄金の戦士

.....

「あれ?ここ何処?、俺はさっきまで学校に行ってきたのに?」

「あの...すみません」

後ろから誰か聞こえた誰なんだろう?。一回振り向くと

...きれいなお嬢さんがいたく!!!

「お嬢さんだなんて」／／／

あれ?聞こえてた?...声を出していないのに何で?

「それは、貴方の心を読んだのです」

あーそうそう。...は?

「今なんて?」

「ですから心を読んだんです」

「どうやって?」

「神様だから」

「あくそうく神様ね...え?神様ですか?」

「はい」

えっ!?!神様!?!本気ですか?

「本気です」

それで神様が俺に何か用ですか?

「ええ、それは...」

神様はいきなり土下座をした

「すみませんでしたー」

うおい!?!何か悪いことしましたか?

「はいとつても悪いことをしました」

それは何?

「貴方を殺してしまっただけです」

ふん...死んだんだ俺

「はい死にました」

だったらどうして俺が此処にいるんですか?普通なら天国なのに

「それは、私がミスして貴方を死なせてしまったので転生させます」
「転生？」

「ようするに別の世界で過ごします」

「解りました。…ちなみに、転生先は？」

「バトルスピリッツです」

「だけど、アルティメットと、ソウルコアが得意なバトスピに行きたいです」

「大丈夫です、その技術が無い世界ですが、アルティメットが発売していない時代にもアルティメットは使えます」

「それじゃあ、お願いします」

「バーストも貴方だけのカードです、それと、その世界で貴方はバトスピのカードからスピリッツを出せる特典も付きますね」

「ありがとうございます」

「それと、貴方はコアの光主になってくださいね」

「え？でもそれじゃあ一人原作キャラが消えちゃいますが」

「大丈夫。あなたは新たな光主。それは黄金の戦士です!!」

「それじゃあ、アルティメット使い!？」

「それじゃあ転生させますね」

「あっ!?!待って!?!」

「では、行ってらっしゃい」

いきなり光が襲ってきて目をつぶった

開けたら・・・え？

・・・落ちてるくく!!?

どうしよ、どうしよ、どうしよく・・・あ!そういえば「バトスピのカードからスピリッツを出せる特典も付けますね」・・・そうだ出せるんだった。よし!これにしよう

「召喚!!アルティメットジークフリード・ベビー!!」

そう叫んだら空からベビーのように小さいスピリッツが現れてベビーの背中に乗った

「ありがとうジークフリード・ベビー」

「きゆるー！きゆるー！」

ジークフリードベビーは何か起こっているなあ、名前が気に入らないのか？

「もしかして・・・その名前が嫌い？」

「きゆるー！」

「そうかー、名前を新しく付けるね」

「きゆるー！」

名前ねー・・・あつこれがいい

「じゃあ、【ライド】これでいい？」

「きゅうー！」

どうやらよかったようだライド

「じゃあライド、そろそろ地面に降りるか」

「きゆるー！」

そう言ってライドは地面にまで下ろして俺はライドから降りた

「ありがとう。ライド」

「きゆるー！」

ライドはうれしそうだ

「さて、ライド、そろそろ町を探るか、なあライド！」

「きゆるー！」

どうやら「うん」って言ってくれたようだ

さて、そろそろ町を探るか・・・

俺は何もない荒野をを歩き続け、色々ハプニングがあつてやつと村に付きました

やつと着いたーあれ？ミミの村？そう言えばクラツキーが居たんだけ？面倒なことになりそうだが、今の俺のデッキはもちろん白のミブロツクデッキで行こうもちろんライドも入れたデッキで相手になるか

「ライド、ここから先は色々メンド臭いことになるが、耐えられるか？」

「きゆるー！」

「やっぱ相棒はお前だな、ライド！」

「きゆるー！」

ライドは俺の上に乗った

「お、おい！乗りたいのか？…はあ、仕方ないな落ちるなよ」

「きゆるー！」

そう言い俺はライドを俺の頭に乗せたまんまで、ミミの村に行った

どうやら、嫌われているなくん？あれは、ミミのソフィアか周りのミミ族は、なるほどこれはかなりやばいあれか

「あろう」

「水や食べ物なら差し上げます」

そう言い一人のミミ族が頭を下げた

「ですからどうかすぐに立ち去ってください、お願いです盗賊の皆さん」

「盗賊じゃないんだけど…それで、君は？」

ミミ族の一人は頭をあげた

「ソフィアと申します。ミミの神殿にお使いする身です

そう言っても聞く耳持たず一つの神社を見た

「あなた方の望みは解っています。でも、それにはお答えできないのです」

「望みはない、盗賊でもない、ただ普通に村に来た旅人だけだ」

そう言った瞬間、空から黄色いバラが降ってきた。俺はそのバラをうまく回避して上を見た

「そこまでだ！、悪党!!」

この男クラツキーか、まさか原作第6話からスタートとはな、ま、こう言うか

「バラを投げて来るな！危ないなあ」

まあ、とにかくこれでいいだろう挑発になるけど

そう言った後、屋根にいたクラツキーは飛んで降りてきた

「ソフィア、こいつらは僕が片づけるよ」

「争い事はいけません」

「話し合うだけ無駄さあ」

「さあ、悪党、僕が相手だ」

そういつた後家からニャーニャーうるさくなくなってきたなあ

「ミミの村のハニー達、僕が来たからにはもう大丈夫」

またニャーニャーうるさい鳴き声が響いてきたぞ、イライラするなあ

「おい、五月蠅い、それに俺は盗賊じゃあ無い。そもそも盗賊なら門から入らず神殿に先ず向かうんじゃないのか？」

「言い訳はノーサンキュ君の選択は2つに1つ。僕とバトルするか？それとも尻尾を巻いて逃げ出すかさ!!」

「どうやら、言い訳で誤解を解こうとしても聞かないか…いいだろう相手になってやる。おまえに未知の力を見せてやろう!!」

「…クラツキー」

「心配するな、ソフィア、クイツクロンで、すぐにかたを着ける

「こつちも準備をするか、ライド！」

「きゆる！」

ライドはそう返事をして空を飛んだ

「お前の戦う色は白だ！」

と叫んだらライドはカードになってデッキの中に入った

「ドラゴンが!!カードに!!」

「さあ！準備はいいな？ゲートオープン解放」

バトルステージに付いたようだ。自分の姿を見たらケンゴーと言う男が着ていた鎧に刀は左の胸にも刺さっている

ミブロツクデッキだったらこの姿か、大きく似合っている。

バトルはスタートしたようだ

バトル 《前半》

「クラツキーのターン」

「スタートステップ」

「ドローステップ」

(手札5)

「メインステップ」

「アルカナビースト・ケンを召喚」

(レベル1)

そうやってクラツキーがカードを出したら

黄色のシンボルが出てきて壊れたらアルカナビースト・ケンが出てきた

「ターンエンドだ。そういえば未知の力を見せてやろうと言ったが、本当にあるのかい？」

「ライフ5」

「リザーブ1」

「コアのトラッシュユ2」

「カードのトラッシュユ0」

「手札4」

「スピリット。アルカナビースト・ケン レベル1が1体」

「ジュンのターン」

「そう焦るな、ゲームは始まったばっかだぜ。スタートステップ」

「コアステップ」

(リザーブ5)

「ドローステップ」

(手札5)

「メインステップ」

「機巧将シグレを召喚」

白のシンボルが割れて白い將軍のロボットが現れた

「あつはは！なんなんだそいつはー、ボロが刀を持つてるみたいな侍

だと思つたよー」

シグレはかなり怒っているようだ

「シグレ!!、相手に笑わせておけ、大きな力を見せつけてやれ!あの時にな。ここから未知の力を見せてやろう。バーストセット!!」

そう言つてテーブルの左上に一枚のカードを伏せた

「ん?…バースト?」

「ああそうさーバースト。それはカウンターのカード、相手がかしってきたらこつちが発動してピンチを逆転できる効果を持つ効果さ、色々条件を達していなければ効果を発動はできないが条件が同じになつたら発動できる効果だ」

「話は終わりか?そろそろターンを終了させてもらおう」

「ライフ5」

「リザーブ0」

「コアのトラッシュユ4」

「カードのトラッシュユ0」

「スピリット。機巧将シグレ レベル1」

「バースト有り」

【手札3】

「クラツキーのターン」

「スタートステップ」

「コアステップ」

(リザーブ3)

「ドローステップ」

(手札5)

「リフレッツシユステップ」

(リザーブ5)

「メインステップ」

「妖精ターニャを召喚」

そう言つと黄色のシンボルが割れて子供みたいな黄色い妖精が現れた

「そしてアルカナビースト・ケンをレベル2へ」

「ターンエンド」

【ライフ5】

【リザーブ1】

【コアのトラッシュユ0】

【カードのトラッシュユ0】

【スピリット。アルカナビースト・ケンレベル2と妖精ターニヤレベル1】

【手札4】

「ジュンのターン」

「スタートステップ」

「コアステップ」

（リザーブ1）

「ドローステップ」

（手札5）

「リフレッシュユステップ」

（リザーブ5）

「メインステップ」

「シグレをレベル2へ」

シグレはガツンと気合が入ったようなレベルアップだった

「そして、ミブロック・ソルジャーを召喚」

白のシンボルが割れて新撰組に似ているロボットが出てきた

「召喚時効果発動、相手のスピリットを手札に戻す」

「何だ?!」

そう言ったらミブロック・ソルジャーの横一閃のような波動でアルカナビースト・ケンに当てて、アルカナビースト・ケンが消えた

【クラッキー。手札5枚】

【アタックステップ】

「ミブロック・ソルジャー、シグレ、相手のライフを奪え!!」

そう言うミブロック・ソルジャーとシグレが一斉に飛び出してクラッキーの方に向かった

「僕はライフで受ける!」

そう言った時まずは、ミブロック・ソルジャーから行ったら相手にバリアが現れてミブロックソルジャーがそのバリアを切っても割れなかったが、シグレも一閃で切ったらバリアが切れて、パリンと砕ける音が聞こえた

「うあっ!!」

痛みが喰らい倒れた

「先生!」

一人のミミ族の一人が相手を心配している

「…この苦しみは…レディー達のためだと思えば、全然平気さ」

「先生、カッコいいです」

「「しびれます」」

五月蠅いなあただバトルしているだけなのに

「ターン終了」

「ジュン」

「ライフ5」

「リザーブ0」

【コアのトラッシュ3】

【カードのトラッシュ0】

【スピリット。機巧将シグレレベル1疲労状態とミブロック・ソルジャーレベル1疲労状態】

「クラツキーのターン」

「僕のターン」

「コアステップ」

(リザーブ3)

「ドローステップ」

(手札6)

「メインステップ」

「妖精ターニャを召喚」

そう言ったらもう1体出てきた

「そして、アルカナビースト・ケンをレベル2で召喚」

そう言ったら手札に戻した黄色いカメが出てきた

「妖精ターニヤ、アルカナビースト・ケン！ミミの村のためにアタックだ！」

そう言ったら2体のスピリットは突撃してきた

「シグレ!!、やっとお前の力が発揮できるぞ!!その力で相手に見せつけてやれ!!」

そう言ったらシグレは大きく立ち上がった

「機巧将シグレでブロック！」

「おいおい、そいつは、疲労状態だぞブロックできるわけが「出来るよ」…え」

「行け!!シグレ!!」

そう言うときシグレは突撃してくる2体のスピリットを2体とも切って消滅した

「何でブロックできるんだい!?!」

「シグレは疲労状態でブロックが可能！」

「何だと!?!」

「シグレを甘く見過ぎたようだな。ああそうそうごめん言いたい事忘れてた」

「えっ?なんだい?」

「シグレは相手のターンの時シグレBP+6000もパワーアップが出来る、つまり今のシグレはBPは10000だよ」

「なんだって!?!」

「さあ、どうする?攻撃する?しない?どっちなんだい?」

「くっ:ターンエンド」

クラツキーは悔しそうにターンエンドした

【ライフ3】

【リザーブ3】

【コアのトラッシュ0】

【カードのトラッシュ2】

【スピリット。妖精ターニヤレベル1】

【手札4】

「シユンのターン」
「スタートステップ」
「コアステップ」
（リザーブ1）
「ドローステップ」
（手札4枚）
「リフレッシュステップ」
（シグレ。ソルジャー回復）
（リザーブ3個）
「メインステップ」
「ミブロック・ソルジャーを召喚」
白のシンボルからパリンと割れてミブロック・ソルジャーが出てきた
「召喚時効果で相手スピリットを1体手札に戻す。よって妖精ターニャを手札に戻す」
そう言ったらミブロック・ソルジャーは波動の横一閃で妖精ターニャは消えた
「アタックステップ、シグレ、攻撃開始」
そう言ったらシグレとソルジャーは構えて飛び出した
「フラッシュタイミング、ブリザードウォールを使わせてもらおうよ」
クラッキーはキラーンと歯を見せて言った
「これでこのターンの間、僕のライフは1個しか減らされない、そしてライフで受ける!!」
シグレは一刀両断で相手のバリアを切った
「うあ!!」
パリン！
（ライフ2）
「ターンエンドだ」
【ライフ5】
【リザーブ】
【コアのトラッシュ2】

【カードのトラッシュ0】

【スピリット。機巧将シグレレベル2 ミブロック・ソルジャー2体
どちらもレベル1】

【手札3】

後半へ進む——!!

バトル 《後編》

「クラツキーのターン」

「僕のターン」

「コアステップ」

(リザーブ4)

「ドローステップ」

(手札6)

「リフレッシユステップ」

(リザーブ8)

「メインステップ」

「妖精ターニャを2体、続いてアルカナビースト・ケンを召喚」

黄色のシンボルが出てきて壊れたらアルカナビースト・ケンと妖精ターニャが出てきた。

「待ち望まれた救いの乙女、知恵の名を持つ至高のエンジェル！。天使長ソフィア、レベル2で降臨！」

翼を飛ばたかせたクラツキーのキースピリット。天使超ソフィアが降臨した。

「ソフィア、見ていておくれ。君と同じ名前のこの美しいスピリットで、僕は必ず勝利を手にする」

「愛の告白ですう〜！」

「キヤーー！」

告白に近い言葉をミミの村達が聞いて、黄色い声を上げた。

「そして彼女は忠実なる僕を連れてくる。偉大な獣、幻獣アイベリツクスレベル2を召喚！」

「アルカナビースト・ケンのコアを幻獣アイベリツクスに移動！」

アルカナビースト・ケンが消え、クラツキーの隣から機械の幻獣が現れた。

「(かかった！)ここでバースト発動！」

「なに!?!」

伏せられたカードが開かれる。

開かれた時にシユンの後ろに雪風が流れそこに文字が浮かび上がった。

「伏せカードは甲竜封絶破だ！」

「な、なんだ!?!」

クラツキーはこのカードは何が起こるか分からなかった。だがせつかく現れたカードは消える意味をしていた。

「このカードは相手の『このスピリット召喚時』に発動できるカード効果は、相手のスピリット／ブレイヴ／ネクサス、どれか一つをデッキの下に戻す！当然戻すのは幻獣アイベリックス！」

「なんだと!?!」

雪風がアイベリックスを包こみ、消えて、クラツキーのデッキの一番下に送られた」

「アイベリックス！」

「ふ、敵将…打ち取ったり！」

キメ台詞を言った。

「…：天使長ソフィアでアタック！ 悪党よ慈愛の鉄槌に涙をするがいい」

天使が羽ばたき、羽を飛ばす攻撃をしてきた。だがここからが絶対に会えずもう二度と最愛するものが消える事を意味していた。

「フラッシュユタイミング！マジック、高速三段突！相手のスピリット1体をデッキの下に戻す！」

「な、なんだと!?!」

「不足コアは疲労状態のミブロック・セイバーから確保。言葉道理に、喰らえ三段突！」

3つの刀が天使長ソフィアを貫き、フィールドから消えた。

「…ソフィアああああああ!?!」

「敵将…また打ち取ったり！」

最愛する姫が消えて心の奥で絶望するクラツキー。その心の奥底には悲しみを生んでいた。

「…：ターン…：エンド」

【ライフ3】

【リザーブ4】

【コアのトラッシュ3】

【カードのトラッシュ2】

【スピリット。妖精ターニャレベル1 2体】

【手札1】

「ジュンのターン」

「スタートステップ」

「コアステップ」

（リザーブ1）

「ドローステップ」

（手札3）

「リフレッシユステップ」

（シグレ、ソルジャー回復。リザーブ4）

「メインステップ」

「シグレをレベル2そして、未知のカード。一期一振を召喚！」

空から剣が降ってきて、シグレの前に刺さった。

「シグレにブレイブ！」

シグレは目の前にある刀を手を取った。

でもこの光景はクラツキーは目に入れていなかった。

死んだ魚の目をして負けるのを待っていた。

「アタックスステップ！シグレでアタック！」

シグレが突撃してきて、クラツキーの答えは、

「……ライフで受ける」

シグレの一閃がクラツキーのライフを削り取った。

【ライフ0】
ジュンWIN

心に残る仲間と、開始、絆の連鎖

バトルが終わり、シユンは倒れているクラツキーを見に行き、色々叱りたいところを言おうと思った。

「…何で諦めた？」

「力の差があり過ぎた。どんな攻め方をしても打ち返される。だから諦めた」

「…そうか。…一つ教えてやる」

クラツキーに背を向け、アドバイスを教えた。

「どんなエースも消える時がある。バトルするのはそういうものですよ。だが、一瞬で現れてから消えても、戦ってくれたスピリットの思いや気持ちは、いつまでもバトルフィールドに現れている。例えば見えなくても、支えてくれる仲間がいる。…それだけは忘れないでください」

シユンはその言葉をクラツキーに教え、ミミの村から出て行った。

「にしても、出番無かったね」

「きゆる〜」

クラツキーのバトルで全然ライドが全然活躍していない事に落ち込んでいた。

「ま、まあいつかタイミングによって出てくると思うよ」

「きゆる?」

「…ゴメン。タイミング無いわ」

「きゆるる〜」

更に深く落ち込んでいた…。

「ほんとゴメン」

謝っても意味が無いけど…でも、何故か謝りたくなってしまふ。

ライドがカード状態になってデッキケースの中に戻った。

「(…もしかして落ち込んでしまった?)」

何とも言えない状況になってしまったシユウどうしようか考えて

も、どうすることには出来なかった。

歩き続けて数日、腹減って厳しい暑さに体力は限界に感じていた。
『こんな時、こんな状況で何処かにカードショップあるのかな?』つと
考えてしまう。

「ん?あ、あれって!」

そんなことに運がよく見つかった。

走って店の中に入った。

「疲れた〜」

店のカウンターに座り、先ずは水を飲んだ。

つて、何か別の席でバトルしているな。

興味ないが、見に行ってみると。

「(あ、あれって!紫乃宮まる!?)」

この作品のメインヒロインで紫のコアの光主。

「(こんなにも早く2人目の光主に出会うとはね……いや、長かった方
ですかね)」

長い旅路をしてやっと店が見えてきたから、違うと思っていた。

「負けたあー!」

いつの間にかバトルは終わっていたようだ。

バトルを終えても相手を探している。

緑デツキ限定で……

「すみません。バトルできますか?」

一回、相手に見てみるか。

「何色で?」

「全部使えますけど…緑を入れた混色デツキでは相手になれませんか
?」

セルジュに全部の属性と混色デツキを言ってからまるは深く考え
る。

この時代混色デツキは弱くは無いと思うが、この世界じゃ弱く見え
る。

だがこれで良い。この弱いと思っっているデッキがこの後に絆のコンボにつながる

「……いいわ」

答えはyes。許可を取れた。

だが、この未来の力をここでこの人たちに見せるのは危険だ。

「すみませんが、バトルフィールドで受けられますか？」

「どうしてかしら？」

「この人たちに僕の実力を見せたく無いのです。圧倒的な実力を他人が見たら、いずれ異界王にも目を付けられる。出来れば目を付けられたくないのです。最強デッキを他人が見たら色々文句を言われそうです」

こんな質問をしても決して断りそうだが、やるしかない。絆のコンボと言えば、無論アレです！

「……いいわ」

「では」

「ゲート・オープン！開放♡」

「ゲート・オープン解放！」

緑の極悪と騎士の無双

バトルはまたしてもコアの光主。

相手は紫乃宮まる。

小悪魔的なバトルアーマーを付けても、どうでもよく見える。相手のバトルアーマーを見て、自分のバトルアーマーを見て見た。紫電のゼロのバトルアーマー。髪型もゼロと似たように紫色。

「(真似をしてみますか。面白そうだし)」

大きな腕が紅茶を入れて、有りがたくいただいた。

「それでは、バトルを始めます。先行か後攻、どちらが宜しいでしょうか?」

「貴方が先行でどうぞ」

「ジュウのターン」

「それでは、スタートステップ」

「ドローステップ」

(手札5)

「メインステップ」

「冥騎獅アロケインを召喚」

「そして、バーストをセットします」

「バースト!」

「一体何が!」

「ふふふ、何が来るのかはお楽しみですよ。ターン終了です」

誰も知らないカードは誰が見ても驚く。だが、これが一番面白い。

【ライフ5】

【リザーブ1】

【コアのトラッシュユ2】

【カードのトラッシュユ0】

【手札4】

【スピリット。冥騎獅アロケイン レベル2が1体】

【バーストあり】

「それ紫のカードじゃん!」

「ご安心を、ちゃんと緑のカードは入っておりますから」

「まゐのターン」

「スタートステップ!」

「コアステップ!」

(リザーブ5)

「ドローステップ!」

(手札5)

「メインステップ!」

「スカルデビル、冥闘士バラムを召喚!」

「アタックステップ! スカルデビル、冥闘士バラムでアタック!」

「スカルデビルの攻撃はライフで受ます。ですが、冥闘士バラムはアロケインでブロックします」

冥闘士バラムとアロケインはぶつかって破壊された。

その後にスカルデビルの攻撃がライフを一つ破壊した。

【ライフ4】

「アロケインの破壊時効果を発動。手札から1枚カードを破棄するこ
とで、疲労状態でフィールドに残ります」

「冥闘士バラムの効果発動!」

幽霊の冥闘士バラムが現れ、アロケインと道ずれにされた。

「ここでバーストを発動させていただきます」

「バースト!?!」

「はい。セットしてあるカードは双光気弾。相手によるスピリット破
壊後なので発動します。効果で、デッキから2枚ドローします」

「ターンエンド」

【ライフ5】

【リザーブ1】

【コアのトラッシュユ3】

【カードのトラッシュユ1】

【手札3】

【スピリット。 スカルデビルレベル1 1体】

「ジュウのターン」
「スタートステップ」
「コアステップ」
（リザーブ4）
「ドローステップ」
（手札5）
「リフレッシュステップ」
（リザーブ5）
「メインステップ」
「キヤメロット・ポーンを召喚します」
「次に、冥侯爵（イビルマーキス）フォカロールを召喚します」
「召喚時効果、手札を1枚破棄してデッキから2枚ドロ。そして
バーストをセットしてターン終了です」
【ライフ4】
【リザーブ0】
【コアのトラッシュ3】
【カードのトラッシュ4】
【手札3】
【スピリット。キヤメロットポーン レベル2と冥侯爵（イビル
マーキス）フォカロールレベル1】
【バーストあり】
「またバースト!?!」
「さあ、どうしますかね?」
バーストを張ったことに今度は何が来るのかをまるは警戒して自
分のターンに入った。
「スタートステップ!」
「まるのターン」
「コアステップ!」
【リザーブ2】
「ドローステップ!」
【手札4】

「リフレッツシユステップ！」

「リザーブ5」

「メインステップ！」

「スカルデーモン、冥闘士バラムを召喚！」

「ターンエンド」

「ライフ5」

「リザーブ0」

「コアのトラッシュユ3」

「カードのトラッシュユ1」

「手札2」

「スピリット。スカルデーモン 冥闘士バラム スカルデビル 全て
レベル

「シユウのターン」

「スタートステップ」

「コアステップ」

（リザーブ1）

「ドローステップ」

（手札4）

「リフレッツシユステップ」

（リザーブ4）

「メインステップ」

「やっと、おいでになりましたね。ヤンオーガをレベル2で召喚」

「緑属性のカードはちゃんと入っているのね…」

「この戦いには仕方なく使い始めました。ターン終了です」

「ライフ4」

「リザーブ0」

「コアのトラッシュユ2」

「カードのトラッシュユ4」

「手札3」

「スピリット。キヤメロットポーン レベル2と冥侯爵（イビルマー
キス）フォカロールレベル1」

「バーストあり」

「まみのターン」

「スタートステップ！」

「コアステップ！」

（リザーブ1）

「ドローステップ！」

（手札3）

「リフレッシュステップ！」

（リザーブ4）

「メインステップ」

「冥闘士バラムをレベル2で召喚！」

「スカルデビルをレベル2にアップ！」

「アタックステップ！冥闘士バラムでアタック！」

「ライフで受けましょう」

「ライフ3」

「次に、冥闘士バラムで「ライフ減少時にバースト発動」何ですって!?!」

「騎士の霸王ソーディアス・アーサー！このカードはコストは12。

だがバーストの条件を達成すればノーコストで召喚出来る！条件は、

自分のライフが3以下の時、よって条件達成！ノーコストで召喚する

！」

「コスト12を…ノーコスト召喚ですって!?!」

「屈強なる伝説の騎士！ 悠久の時を超え、今ここに甦れ！ 騎士の

霸王ソーディアス・アーサー召喚！」

紫の雲が空を包む、その穴が開き、朝日のような日光と共に、伝説の騎士が降りてきた。

自分の愛用していた剣を鞘から抜き、剣を空に掲げ、紫の雲が消え、その空はいつものバトルフィールドより綺麗な青空だった。

「ターンエンド」

相手は今までにない戦術を使って来るカードバトラー。無理に攻めては自分の首を絞めるだけ。なら、ここでターンエンドして自分のターンになった時に、一気にたたみかけようとしていた。

「ライフ5」
「リザーブ1」
「コアのトラッシュユ0」
「カードのトラッシュユ1」
「手札3」
「スピリット。スカルデーモン レベル1 スカルデビル レベル2
冥闘士バラム(疲労) レベル2」
「シュウのターン」
「スタートステップ」
「コアステップ」
「リザーブ1」
「ドローステップ」
(手札4)
「リフレッシュステップ」
(リザーブ3)
「メインステップ」
「ヤンオーガをレベル3に上げ、マジック、ライフチャージ不足コアは
キヤメロット・ポーンとソーディアス・アーサーのコアから確保」
「ライフチャージはコスト3以上のスピリットを破壊することでボイ
ドからコア3個ブースト出来る」
「一気に3個もコアブースト!?!」
「対象はヤンオーガ。ヤンオーガが破壊され、ボイドからコア3個リ
ザーブへ、それと、ヤンオーガのレベル3破壊時効果発動でさらにボ
イドからコア3個リザーブへ」
「何ですって!?!」
「手札からヤンオーガをレベル3で召喚」
「もしかして!?!」
「手札からライフチャージ。対象はヤンオーガ」
「マジック効果と破壊時効果合計で6個コアブースト」
「一気に12コアまでもコアブーストを!?!」

どうやら今のコンボでセルジュまでも驚いているようだ。ここか

らが更に驚くカードを使うのに。

「冥侯爵（イビルマーキス）フオカロールを召喚。召喚時に手札1枚捨てて2枚ドロー」

デツキに手を伸ばそうとしたが、手を強く握り締め、

「（ここだ！僕の必殺技を使うよ。ごめんねまる。僕は勝ちに行く）」

心の中で謝罪して意味のない必殺技を使った。

「（ディスプレイ・ドロー！）：バーストセット」

「またバースト!?!」

「手札から、骨孩児を召喚。召喚時効果で自分の手札が3枚になるようにカードをドローする」

「マジック、双翼乱舞デツキから2枚ドロー」

「一気に手札補給!?!」

「ふふふ、なかなか面白い？ターンエンド」

「何でアタックしてこないの?」

攻撃してこない事に疑問に思っていたまる。

「簡単な事です。時間が経てば、すぐさまに攻撃しますからご安心を」

【ライフ3】

【リザーブ1】

【コアのトラッシュ16】

【カードのトラッシュ10】

【手札4】

【スピリット。ソーディアス・アーサー 骨孩児 冥侯爵（イビル

マーキス）フオカロール 2体 全てレベル1】

【まるのターン】

「（多分……このターンで攻めないと、負けてしまう）スタートステップ」

【コアステップ】

（リザーブ2）

【ドローステップ】

（手札4）

【リフレッシュステップ】

（冥闘士バラム 回復）

「メインステップ」

「スカルデーモンを召喚！さらに、ブロンズメイデンを召喚！召喚時効果でデッキから1枚ドロロー！」相手がスピリットの召喚時効果を使いましたので、バーストを発動させてもらいます」このタイミングで!？」

「バーストカードは、ヴァイキング・レイヴ。このカードのバースト効果はこのバーストが相手のメインステップに発動したとき、このスピリットを召喚します。その後、相手のメインステップを終了します」「今度は白!?!しかもメインステップを終了させるカード!?!」

「さあ、アタックステップになっていますが、どうなさいますか？」

「……ターンエンド」

まだ準備をしたかったが、バースト効果でメインステップを終了されてしまった。

この状況ではターンを終了するを得ない。

【ライフ5】

【リザーブ2】

【コアのトラッシュユ2】

【カードのトラッシュユ1】

【手札3】

【スピリット。スカルデーモン2体 スカルデビル 冥闘士バラム レベル1】

【「ジュウのターン」

「スタートステップ」

「コアステップ」

（リザーブ1）

「ドローステップ」

（手札5）

「リフレッシュステップ」

（リザーブのコア17個）

「メインステップ」

「ヴァイキング・レイヴ レベル3へアップします」

「更に、獅子星鎧レオブレイヴを召喚」

現れたのは白の獅子。このカードが新たなパワーを作り出す。

「覚悟はよろしいでしょうか？」

「何かしら？」

「騎士の霸王ソーディアス・アーサーに合体（ブレイブ）！」

「ぶ、ブレイブ!？」

紫の鎧から白に変わり、獅子の顔がソーディアス・アーサーの胸当てに装着して、刀はソーディアス・アーサーの剣に装着し、紫の色柄が金色に変えた。

「更に、刃狼ベオ・ウルフを召喚します。これもブレイブカードなので、ヴァイキング・レイヴにブレイブ！」

「またブレイブですって!？」

「アタックステップ、合体（ブレイブ）スピリットでアタックします！騎士の霸王ソーディアス・アーサーのブレイブアタック時効果を発動いたします。相手スピリットのコア1個ボイドへ、対象は冥闘士バラムでございます」

「さあ、このアタックはどう受けますか？」

「ライフで受ける！」

「このスピリットブレイブのシンボルも加えて、Wシンボルでございますー！」

「きゃあ!？」

「ライフ3」

「次に、ヴァイキング・レイヴで合体（ブレイブ）アタック！」

「ブロンズメイデンでブロック！」

「獅子星鎧レオブレイヴ時効果を発動！スピリットが疲労した時、このカードは回復する！」

「何ですって!？」

ヴァイキング・レイヴは見事に鉄の鎧を破壊した。

「更に、ベオ・ウルフのブレイブアタック時効果を発動します！DPを比べ相手のスピリットだけを破壊した時に、相手のライフのコア2個

をリザーブに送ります」

「何ですって!?!きゃあああああ!」

【ライフ1】

「ヴィオレ様!」

「更に、ソーディアス・アークサーでブレイブアタック!アタック時、冥闘士バラムのコア1個ボイドへ!」

「スカルデビルでブロック!」

「ブレイブ時効果で回復!」

一刀両断で破壊した。

「ブレイブアタック!ブレイブアタック時効果で、スカルデーモンの

コア1個ボイドへ!」

「ライフで受ける!」

「きゃあああああああ!!」

【ライフ0】

「対戦、ありがとうございました」

黄金の説明

バトルを終えた後、なるべく急いで店から出ようとしたが即座にまゐりに引き止められ、カードの事を聞き出そうとしていた。

「…残念ですが、教えることはできません」

「どうして「ですが」」

「このことは誰にも言わずに青の世界で会えたのなら、さつき使ったカードの事を説明します。それでよろしいでしょうか？」

「こういう交渉でなんとかなったが、急いで青の世界に向かう事にし、店から出ようとしたところ。」

店から出て、目の前に1人の女性があった。

普通の女性にしか見えなかったが、ボロのマントを羽織って、髪の毛の所に杖がある。しかも髪色はピンク。

この女性はもしかして!?

なるべく自分の秘密は主人公に会ってから話そうとしていたが、この女性に会ったら直に僕がコアの光主だとばれてしまう。しかも何処にも属さない色、黄金色がばれたら、一体何者だと思われる。…でも、それも面白そうだね。一体何者だと思わせることが。

ジュンは何もなかったかのようにすれ違い、青の世界に向かおうとしていたが、

杖が眩しいような黄金色に光った。

「はあ〜」

深いため息をして、スーパーケッターを降りて足で歩いていた女性が見えた。

「(どうやっても結界があるせいで入る事なんて出来っこないし。ダメみたいに激突したら弾き飛ばされるし)」

「どうやら侵入したい場所があるが、どうしても入れない事で落ち込みながら歩いていた。」

そんななか店を見つけて酒を飲もうとして入ろうとしていた所。ダンと背が同じ少年が店を出てきて、その少年とすれ違った。

だがこの一瞬、杖が黄色に光った。

「(この子、コアの光主!?でも何か違う…黄色に輝いているけどここまで輝かないし…それに、光の戦士はクラツキーで見つかったのに…この子何者?!) 待ちなさい!そこの子!」

「…やはり、ばれましたか」

少年は振り向き、私の前に向いた。

「(この子はコアの光主で間違いない!…でも、同じ光主がいるなんて聞いたことも無いし…)」

「その様子では同じコアの光主が二人にいるのは疑問に思っていますね?」

「(この子、人の心を読めるの!?)」

一瞬心の中で驚いていたが、直に冷静に保ち、少年と会話をした。

「ねえ、君何者?」

「僕ですか?ジユンですが、何か?」

「そうじゃないわよ。同じコアの光主が2人いる訳がないわ」

「残念ですが、僕は黄色の戦士じゃありませんよ」

「じゃあ、この杖に反応しているこの色は?」

「(ここじゃ説明したら大騒ぎになりますから、別のところで、後、デガラシ魔法の中に結界入っていたかな?異界王にばれると大変なことになるんだ」

「(異界王に…?じゃあ、異界王にも悟られたくないヒミツを持っているの!?)」

「無理ですかね?」

「デガラシには無理だけど…バトルフィールドの所なら誰にも知られずに話せるわ」

「異界王やマザーコアの光主にばれてしまいそうですが、まあいいでしょう」

マジサの魔法で、バトルフィールドの所に移動させてくれた。

「(フッフ、驚いてる驚いてる)」

ジユンは未知の力に驚いている女性、マギサ。

彼女は最終決戦でダンがマザーコアを取り戻した際、ダンの肉体がその力に耐えられないことを悟り、マザーコアの光主そして女神となり、異界と現実世界の通路を封印してふたつの世界を再び分離した。というキャラクター。

持っている杖でコアの光主を判別することができる。

なら僕が黄色に見えるけど、その黄色は少し黄金のような輝き、それはどこにも属さない色そんな色は一切聞いたこと無いシンボル。

それはどんな人でも驚いてしまうシンボル。

「バトスピには面白い可能性があると思いますよ」

「そんな説明じゃ、答えにならないわ」

「じゃあ、こう言いますよ。僕のシンボルは、ご存じの通り黄色。だが少し違う。なら答えは簡単ですよ。……どこにも属さない色……つまり第七番目の新しいコアの光主ですよ」

「第七番目のコアの光主!?!」

「そう誰も耳に聞けば、強靱!、無敵!、最強!つと言われる究極のシンボル」

シユウは自分の中にあるアルティメットシンボルを出してマギサに見せて答えた。

「黄金の、アルティメットシンボル!」

見せたシンボルは重ね合った三角とリザーブのコアの六角形のシンボルだった。

「お…黄金の…アルティメットシンボル!?!」

マギサは見たことも聞いたことも無い新たなコアの光主が現れたことに驚きが隠せなかった。マザーコアの中には属さない新たなシンボル。そんな光主見たことも聞いたことも無かった。

「そんなの当たり前ですよ。このシンボルは未来から生まれた新たな力。そして、宇宙にのどかにカードたちが封印され、その時に封印が外れ、新たなシンボルとして生まれた可能性…。それがこのアルティメットシンボルです」

未知の力の正体は未来の力。

杖から眩しい黄金の光が溢れだす。

「説明として、実際にカードを見せてやりましょう」

ジューンはアルティメットジークフリードを取出し、マジサに見せた。

「これがアルティメットカードです。見た目は少し黄金のガラが入っており、シンボルだけは、この僕が見せたシンボルと同じカードです」

マジサはアルティメットカードをよく見ていた。

「(属性はあくまであるけど…シンボルだけは違うって事ね…)ってレベル5!?!」

規則がいの数字にまたもや驚いていた。

「スピリットは最大はレベル3まで、ですがアルティメットは最大はレベル5としています。まあできればスピリットのレベルと同じにする、3として扱ってください。でもあくまでレベル5ですよ」

「(これがアルティメット…もうルール破りのカードね…DPにレベルは最初から3で戦う。…そんなカードは絶対に勝てない。…でも、マジックカードなら)」

と微かな希望が見えてきたが、少年の一言ですぐきに消え去った。「ちなみに、このカードはスピットではなくアルティメットなので、相手スピリット1体破壊するとか手札に戻すとか効きませんよ。だって左横にスピリットではなくアルティメットだから」

そんな言葉を聞けば誰でも頭を抱え込んでしまう。それじゃあどんなカード効果も絶対に受け付けず、倒すにはDP勝負となる。そんな高いDPのカードなんてどこにもない。

「これがアルティメットですよ。どんな相手だろうとこのカードの前

ではスピリットなんて足元にも及びませんよ。じゃあもう終わりにしても良いですか？」

ジユンは終わって早く青の世界に向かいたかった。

チャンピオンシップに早く向かうため自分の足ではかなり遠くなる。

「(こんなやつかいなカードが異界王の手に奪われたら世界は誰にも止められない。世界は絶対に滅ぶことになる!) ねえ君! 一緒に旅しない? きつと楽しいたびになるよ!」

マジサは危険を悟って、引き込もうとした。

異界王よりもこの子をどうにかしないと。

「楽しい旅なら参加しますか」

「(上手く行つた!?! いやでも何で!?)」

「どんな考え方にしても、カードが狙われる事には分かって引き込もうとしていたのは分かっていましたから」

「(この子、本当に人間!?! こんなに心を読むことが出来るなんて!?)」

「あ、ちなみにこれはバトスピのバトルで相手のプレイングの頭の頭を考えていることを予想して言っていますから、まあ下手なてつぽも数撃ち当たる。みたいなことですよ」

「そんなプレイングがあつてたまるかああああああ!!!」

マジサは発狂した。そんなプレイングなんてどこにもないし聞いたことも無い。この子本当に人間!?! っと思ひ込んでしまう。

「うーん。でも条件があるね」

「なにになに!?! 出来る限りの事はお姉さんに何でも言つてね!」

「この条件をのまなければ、次会えるかどうか不安になる。

「条件は確か僕が出て行くとしたときの店、知っていますね?」

「ええ、その店がどうかしたの?」

「あそこに紫の戦士がいるんですよ」

「何ですって!?!」

これ以上なことはアルティメットの説明と同じ程驚いた。この子はコアの光主を見つけられることに。

「その子仲間に引き連れてください。彼女が持っている船、ヴァイオ

レット号。あの船なら早くて一週間か数日でグレンの大地に張られている結界の所まで早く行けます。目的は知っていますから、色々アドバイスをおきます」

「(……どこまで驚けばいいのかしら……?)」

マジサの目的は知っていて、そのアドバイスを教えてくれることに。

「ですが、出航は赤の戦士と黄色の戦士が揃ってからですよ。その条件だけは決して、忘れないでください」

「言えることはここまでです。さあ、どうしますか?」

そんなのもちろん。

「乗るわー!」